(148) 栃木県川俣の栗山鉱山

参考文献（１）にモリブデン鉱床として、本鉱山がわずか２行で紹介されていた。以下その全文「栃木県塩谷郡栗山村にあり、鬼怒川上流川俣温泉に近い錆沢の下流部に位置し、花崗岩中の輝水鉛鉱を含む石英脈である。」　図１，図２参照。場所及び沢の名前と大雑把な位置情報を手がかりに、２０１１年に数回にわたり探査を行っていた。その報告。

第１回：錆沢を沢口付近から遡上しようとし、その付近に適当な駐車箇所を探したが、沢口付近には川俣温泉集落が密集していて、見つけられなかった。地形図を見ると、温泉の西方先に、山側に林道があり、錆沢に沿って伸びているのを見いだした。図２参照。その林道入口まで進んでみる。その付近に適当な広さの空き地があり、駐車できることを確認した。図２のＰ点。林道は先までしっかりしているようである。

第２回：Ｐ点に駐車し、林道をＡ点まで進み、ここから錆沢に降りた。Ｂ点である。転石を探しながら、沢を遡上していったが、眼前に絶壁のような大きな砂防ダムがあった。Ｃ点である。写真６参照。ダムを巻くのも困難そうであり、ここで撤退。

第３回：Ａ点より林道を先に進み、周りの観察を怠ることなく、進んだ。Ｅ点で気になる箇所があったが、後の課題として、経路沢より先まで、Ｄ点付近まで林道を進んだ。先には何もないと判断し、Ｅ点まで戻った。Ｅ点のところからは、標高１１４３ｍの小山を巻くように、古い林道があった。コンクリートの擁壁、石垣組を擁して、幅の広いしっかりとした「林道」である。道幅は車がすれ違うことができる程の幅である。これを進んで行くと、林道は先は無く、突然に行き止まりとなっていた。Ｆ点。下方の沢には砂防ダムが見える。前回行き止まったダムである。今回の探査はここまで。

実のところ、長い間この鉱山のことは、忘れていた。が、最近、突然、岩友から、「川俣温泉のところのモリブデン鉱床」の探査への誘いを受けた。鉱床名は知らないらしい。情報を交換し合い、著者の過去の探査記録と比較検討すると、このモリブデン鉱床は、著者が２０１１年次に探査を繰り返した「栗山鉱山」との確信を得た。地質調査所がインターネットで公開している「地質図Ｎａｖｉ」で得られる地質図には、鉱山名は表記されていないが、モリブデン鉱床の記号が記されていた。図３参照。上述している栗山鉱山の位置らしい箇所とほぼ一致している。即探査を決断した。

第４回：岩友と２人で探査。Ｐ→Ｅ→Ｆと進み、林道終端のところから、有るか無いかの葛折りの道を下り、砂防ダムの上に降り立った。ここから、沢の左岸を特に観察しながら、川幅が広く、ほぼ平坦になっている沢を上流に進んだ。左岸の１箇所で、入口がほぼ埋まりかけている坑口跡を見つけた。周りで鉱石、転石を探したが、残念ながらそれらしいモリブデン鉱石の標本は見つけてはいない。坑口付近の土砂を掘り返す必要があったのかも。次回を期待しよう。

現地への経路は次の通りである。今市から１２１号線を北上し、龍王峡先で川治では無く、川俣方面へと２３号線に入っていく。後は、鬼怒川に沿って、川俣温泉へと西行して行く。この２３号は、所によって道幅が狭く、曲がりくねってもいる。ヘットライトを点灯しての走行を勧める。

探査日　２０１１年後半、２０１７年７月２日

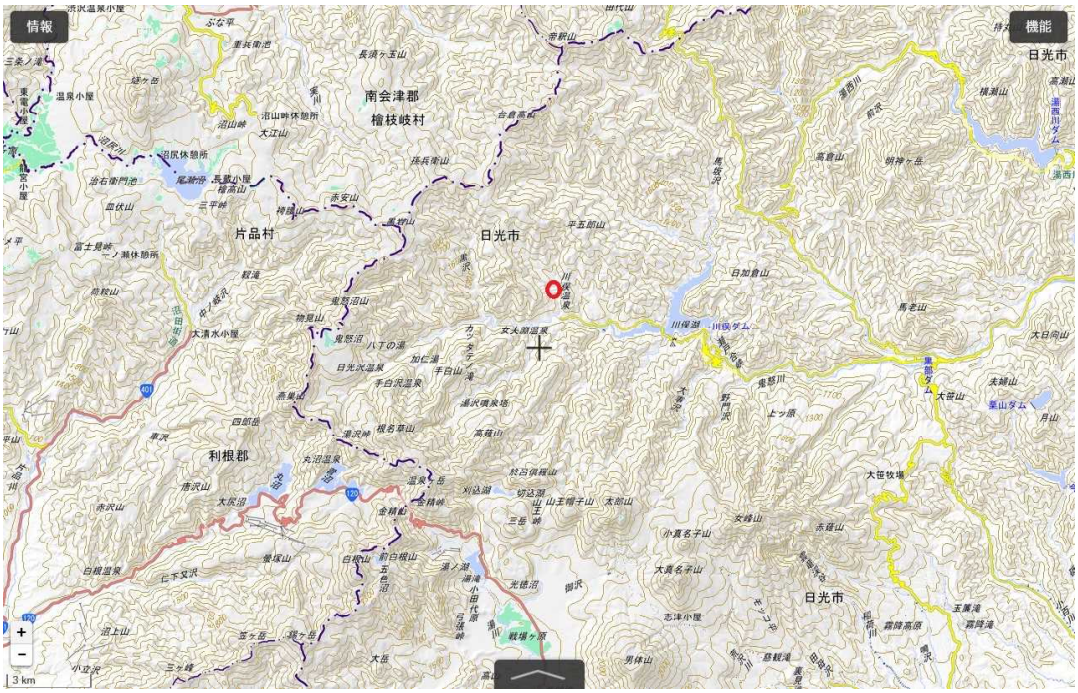

図１　中央付近の赤丸あたりが栗山鉱山跡。鬼怒川上流の川俣温泉付近にある。この付近には多数の温泉がある。予定に組み入れれば、楽しい訪問行となろう。

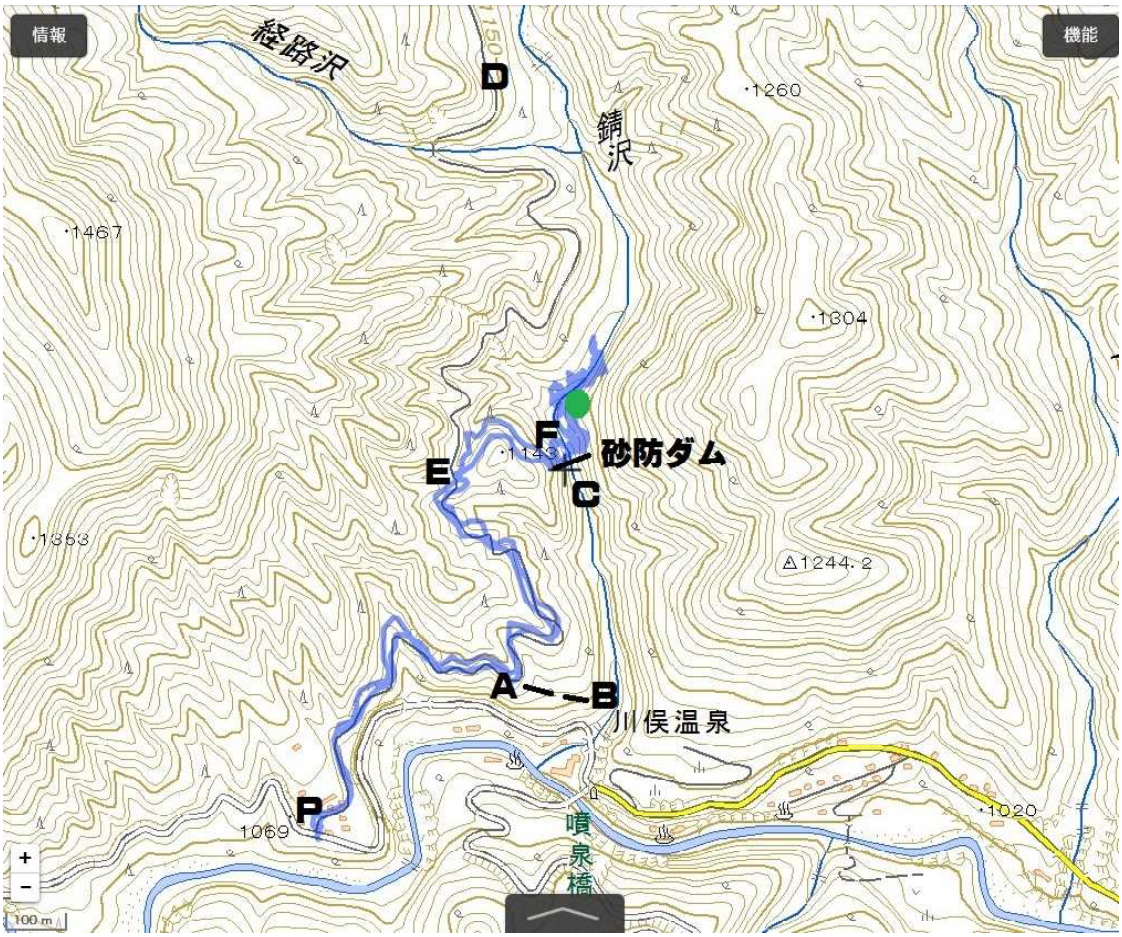

図２　図１の部分拡大地形図中に、水色でガーミンで測地した探査経路を描いている。Ｐ点が駐車場。ここから林道に入っている。Ｅ点で、主林道を外れ、廃林道を行き止まりのＦ点まで進む。Ｆ点より急斜面を下り、砂防ダムの上に降りる。黄緑丸が坑口跡。沢は坑口跡先まで広く、平坦である。中央上部のＤ点までの経路ログは無い。２０１１年当時はガーミンを持ってはいなかったので。

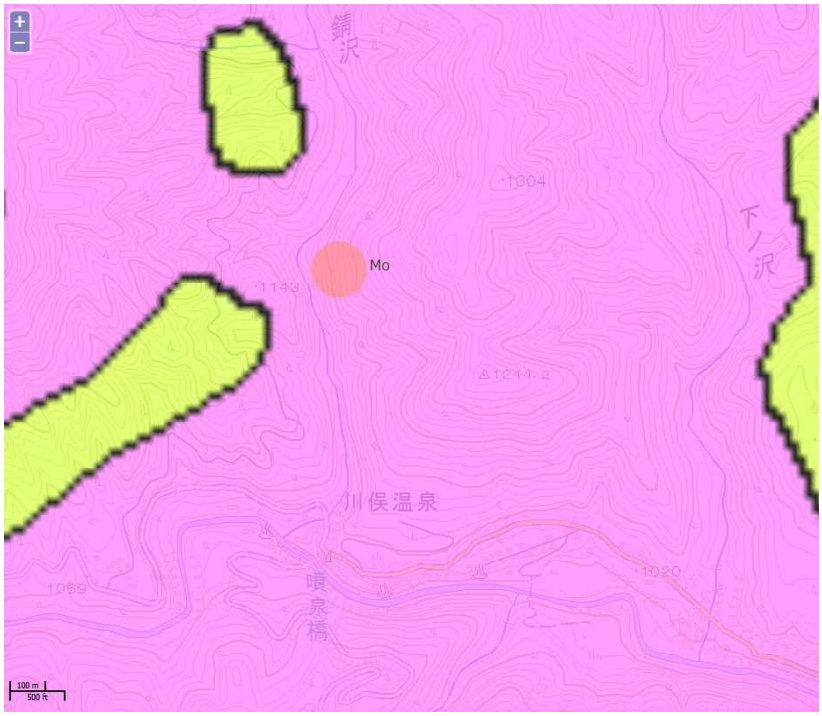

図３　地質調査所の「地質図Ｎａｖｉ」より。川俣温泉、錆沢付近の地質及び鉱床図。中央付近に「Ｍｏ」（＝モリブデン鉱床）が記されている。

鉱山跡写真

写真１　川俣温泉を過ぎて、図２中のＰ点のところ。右側に林道が延びている。直ぐにゲートがあり、閉じている。右手の草地あたりは一応空き地。

写真２　Ｐ点から歩いて約２０分程か。Ｅ点である。切り通し。右手は標高１１４３ｍの小山。これを巻くように、前方右側に「立派な」廃林道が伸びており、これを進んで行く。

写真３　Ｅ点からＦ点の間の廃林道。道中の木々の太さが捨てられてからの時間を物語っているはず。山側及び谷側にしっかりとした擁壁がある。確固たる道である。岩友が中央に立っているので比較できよう。非常に広い林道。岩友と問答した。なぜ？　「砂防ダムのため？」　「鉱山のため？」

写真４　錆沢左岸、河床水準当たりで見つけた坑口跡。中央の黒い部分。もう少しで隠れてしまいそう。後のことも考えて、「カッチャ」で入口付近を広げておいた。それでも、草木の生い茂った時期は見つけにくいかも知れない。

写真５　小さく開いている坑口から、カメラを差し入れて内部を撮影。内部の床も大分埋まっていそうだが。入口の土砂を片づければ、内部の様子がよりわかるであろう。

写真６　Ｃ点で見上げた砂防ダムの様相。２段作りである。なを、この写真は１２月に撮影したもの。岩の上に白い雪が残っている。

写真７　同砂防ダムを堰堤上から下流を見る。７月である。鉱山探査の最適時期は晩秋から春が良いのがわかろう。

結語

（１）本栗山鉱山が、どれほどの規模の鉱山であったのか、著者はわかってはいない。砂防ダムの上流左岸、現在の河床水準で坑口跡を見つけている。ダムの土砂の堆積の結果、なだらかになった河床でである。この坑口跡より下流に坑口があったとしても、土砂の堆積で埋もれてしまったであろう。図３から読み取れるが、河床より少し高い位置に、坑口跡があるのかも知れない。但し、Ｍｏの鉱床位置を示している丸印の位置が「正しい」と考えればだが。しかし、付近で、露頭鉱脈が見つかるかも知れない。
（２）やはり、鉱山としての鉱石標本が欲しい。ダムの下流で、転石を探すのも一案か。
（３）図３中の「Ｍｏ」の鉱床位置を示している丸印が、正しく鉱床の位置を示しているならば、谷の斜面上、谷底から高度差が５０ｍの位置である。次回には、この当たりも探査をしてみたい。但し、地質図中の鉱山記号や鉱床記号のマーキング位置は、往々にして不正確の場合もあることを頭に入れておく必要がある。

参考文献

（１）「日本地方鉱床誌　関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、１９７３年。